



“好きを仕事に”から“仕事を好きに”へ

原田 晋
はらだ皮膚科クリニック

インドア派である私は体を動かすことが苦手であり、趣味はというともっぱらジャズを聴きに行ったりプロ野球を観戦したりして過ごしている。中でも大好きなプロ野球観戦には、一軍戦のみならずときには炎天下で開催される二軍戦にまで観戦に出かけている。二軍戦に出場している選手の多くは入団して数年以内の20歳前後の若者たちであるが、その中に混じて二軍落ちしてきた35歳前後のベテラン選手が頑張っているのをみると人生の哀愁を感じてしまう。

プロ野球をはじめとするスポーツの世界はまさに人生の縮図であり、一般の社会であれば今後を嘱望される年齢であるはずの35歳前後の壮年層が、スポーツ選手に限れば退職間近の窓際族に該当する場合もある。プロ野球選手ともなれば、野球が大好きで学生時代には卓越した才能を発揮してプロ球団に入団してきたはずなのだが、二軍戦で若者たちに混じって汗を流している35歳前後の選手を目の当たりにすると「果たしてこの選手はいまでも野球を楽しんでいるのだろうか？」とのお節介な疑念を抱いてしまう。

反面わが身を振り返ると、ありがたいことに開業医には定年はなく、意欲が続くかぎり年齢にかかわらず働き続けることが可能である。ただし、開業医生活は単調であり、ときには日々の生活にウンザリする場合も少なくはない。かくいう私自身もご多分に洩れず、やれやれと感じながら診療に

携わることも日常茶飯事であるが、そうやって毎日を惰性で過ごすことが好ましいはずはない。

幸い私の場合は食物アレルギーをはじめとする即時型アレルギーを専門としており、まれだと思われる即時型アレルギーの患者さんが来院された場合には俄然元気が出てきて、血液検査やプリックテストなどどのように検査を進めて原因となるアレルゲンを解明していこうかとワクワク感が高まってくる。

皮膚科という学問は多岐の領域に及ぶため専門分野は個々の医師によってまちまちであるが、興味を抱くことのできるなんらかのサブスペシャリティを有しておく、日々単調な開業医生活の中にも楽しみを見出すことができるのではないだろうか。せっき、皮膚科という学問に興味を抱き、“好きを仕事に”して皮膚科医を志した身としては、“仕事を好きに”の状態を維持しつつ終生皮膚科医ライフを楽しんでいきたいと考えている。